評価の観点	思考・判断・表現	単元	公民的分野「人権と共生社会」（3年生）	実践日時	R2.10.20
本時のねらい	桶川市での生活保護世帯のクーラー問題を通して，憲法で保障している「健康で文化的な最低限度の生活」が時代によって変化し，私たちの権利を絶えず保障していることに気付き，社会的弱者の救済について私たちの関わり方を考えることができる。				

＜主体的・対話的で深い学びにつなげる指導について＞

【手立て①：新聞を活用し，課題につなげる】

・１９９４年９月の実際の新聞を基にして，導入を行った。新聞の見出し「クーラーはぜいたく」を使い，「クーラーは健康的な生活を過ごすために必要なのに，どうしてこんな記事が出るのか。」と既習とのずれを生徒に感じさせ，課題に対する意欲化を図った。

「クーラーはぜいたく」
生活保護者に外させる
40度超え78歳 脱水症に

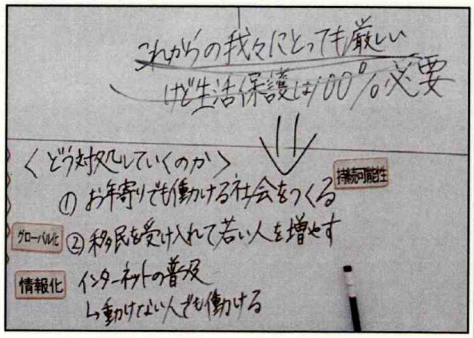
・「今日の課題はどんな視点で追究をすれば解決できそうかな。」と問うことで，視点を明らかにした。今回の授業では「生活保護受給者」と「市」を視点に二つの立場から追究を進めれば課題が解決できそうだ，ということを全体で確認してから追究を行った。新聞の読み取りには，時間がかかるため，２時間構成とし，前時にて課題化，個人追究を行った。

【手立て②：主体的・対話的な学びで課題解決を図る】

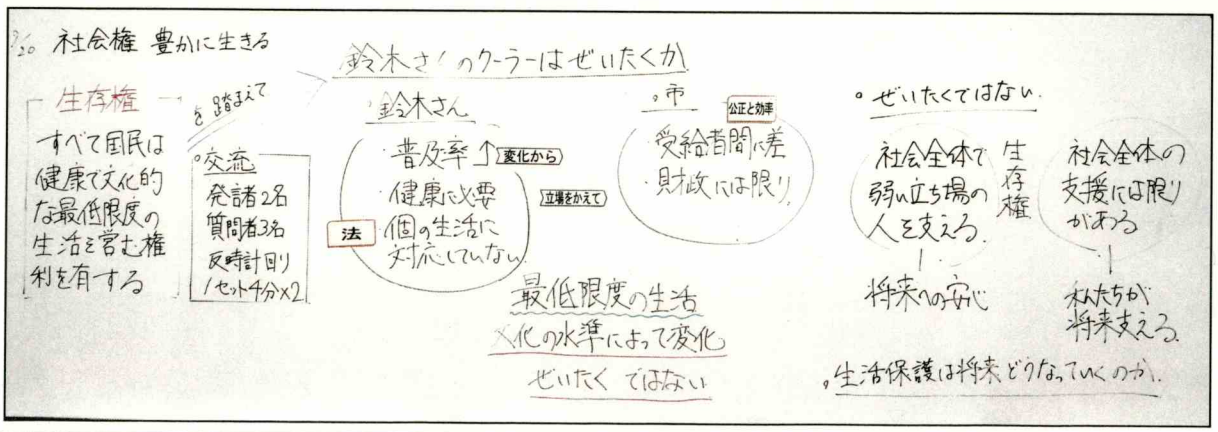
・アゴラ教室にて，小集団でホワイトボードにまとめる活動を取り入れた。視点を明らかにしたことで，小集団での追究が明確になった。また，小集団での交流を行うことで，疑問に感じたことを質問したり，まとめ方について意見を交流したりする姿が見られた。小集団ごとへの声かけでは，「公正・公平から考えてみるとどうなるかな。」や「○班は，△△の見方や考え方を使っていたよ。」と生徒同士の対話が生まれるような声かけを意識した。

【手立て③：よりよい社会を構想するために】

・終末では，「生活保護」は将来どうなっていくのかについて，自分の考えを交流し，小集団でまとめる活動を行った。そこで「これからはどのような社会になっていくのか。」と問うことで，公民的分野で既習の「情報化」「グローバル化」「少子高齢化」「持続可能性」などの見方や考え方を使って，現時点での知識を活用して，よりよい社会について具体的に構想することができるようにした。



＜板書，生徒の作品，ノートなど＞



【公民　第２章　個人の尊重と日本国憲法】　２節　人権と共生社会

本時のねらい（5／7）	桶川市での生活保護世帯のクーラー問題を通して，憲法で保障している「健康で文化的な最低限度の生活」が時代によって変化し，私たちの権利を絶えず保障していることに気付き，社会的弱者の救済について私たちも関わっていることが分かる。

評価規準	評価方法
【思考・判断・表現】 桶川市での生活保護世帯のクーラー問題を通して，憲法で保障している「健康で文化的な最低限度の生活」が時代によって変化し，私たちの権利を絶えず保障していることに気付き，社会的弱者の救済について私たちも関わっていることがわかる。	・２，３４，の場面での交流，発言内容 ・５の場面でのまとめの記述内容

【本時活用したい既習の知識，概念】

・人権は，人間が生まれながらにもつ権利として保障されている。　・基本的人権を保障している法の意義。

・「法に基づく政治」が民主政治の原理になっている。

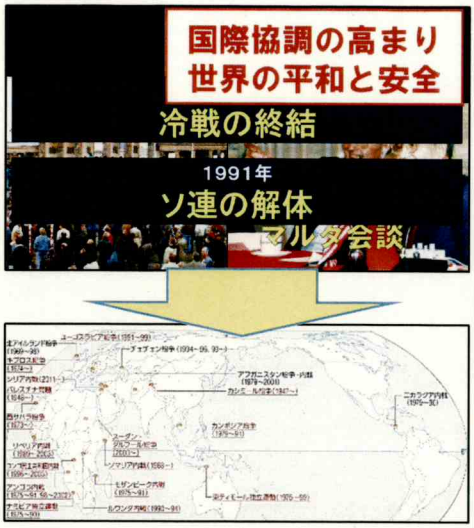
場	生徒の主な学習活動と生徒の意識の流れ	○指導・援助　◆個に応じた手立て　・資料
つかむ／ふかめる／まとめる	1　前時からの課題を確認する。 **鈴木さんのクーラーは「ぜいたく」なのだろうか** 2　前時にまとめた考えを，ホワイトボードを用いて交流する。 **【鈴木さんの立場から】** ・クーラーは確かにぜいたくだと思うが，生活保護を受ける前に買ったものだから取る必要は無い。 ・７割が基準となっているが命に関わること。全て国の方針に従うのは，個々にあっていない。 ・７９歳の高齢者。４０度を超える日々では命に関わる危険があると思う。クーラーは取り外すべきではなかった。 **【市の立場から】** ・毎月８万円も保護してもらっているのに，そんな高いものを買うのはおかしい。 ・規定で７割と決まっている。それを認めると，国からお金をもらっている人の方が，いい生活ができてしまう。 ・売却して，生活費に充てるのが，自立へとつながっている。 **憲法が保障している健康で文化的な最低限度の生活とはどこまでなのか** 3　憲法２５条に基づいて，国がクーラーの保有を認めたことを資料で知り，どうして最低限度の生活で所持できるものが決められているのか考える。 **社会全体で弱い立場の人への支援** ・全ての人々が，人間らしい生活をするために決められている。 ・いつ病気や事故に巻き込まれるかもしれない。そんな時に安心できるから。 **社会全体での支援には限りがある** ・政府の財政には限りがある。何もかも許可していると財源がなくなってしまう。 ・全て行政が面倒を見ると，その人の自立を促さない。 4　憲法２５条に基づいた「生活保護」に対して将来どうなっていくか話し合う。 私たちが病気や事故など不測の事態に対応するためにも，生活保護の仕組みは必要だ。また，少子高齢化から考えると，将来私たちが高齢者のほかに弱い立場の人を支えていくことになる。 5　本時の学習を振り返ってまとめを書き，交流をする。 市は誰もが平等になるように，規定にそってクーラーを外させた。しかし，最低限度の生活は国民の生活の水準によって変化するので，クーラーも認められ，ぜいたくではなくなった。これから少子高齢化が進むことで，私たちが社会の中で弱い立場の人々を支えていくことにもなる。また，病気や事故で支えられる側になるかもしれないので，生活保護は安心のためにも必要だ。しかし，社会全体での支援には限りがあるので，持続可能な仕組みになるために，私が社会の一員として働くことも大切だ。	・毎日新聞　１９９４年９月６日 ○本時の学習では，本時では，行政側の学習をしていないため，最低限度の生活を拡大していきたいという意見が多く出ることが予想される。そこで，本時の学習の前にＰ１４６の「国の一般会計予算」を説明し，予算には限りがあることを抑えておく。 ○前時にて班に分かれて，考え方をホワイトボードにまとめておく。 **【実態を見届ける】** ○全体交流の場では，「社会科の見方・考え方」のカードを使って説明している班を取り上げ，鈴木さんの立場だけでなく，行政側の立場からも考えられるように促す。 **深い学びにつなげるための手立て** **○社会的な見方・考え方を共有する指導** 【２，３の場面】 ・今までに学習してきた，公民の見方・考え方確認する。 ・ホワイトボードに既習の見方・考え方を位置づけておく。 ・見方・考え方を使っている生徒を認め，そのよさを広めていく。 **○実社会に主体的に参画していこうとする指導**　【４の場面】 ・「すべての立場の人にとって，公正で効率ですか。」と問うことで，一部の人だけでなく，私を含む全ての人々にとってよりよい社会とは何か考えさせる。 ○「社会全体での支援には限りがある中で，全ての人の人間らしい生活を保障するためには，社会の一員としてどうしていくのか。」と問うことで，改めて疑問を生じ，よりよい社会を創り出すためには，主体的に社会に参画していく必要性を感じさせていく。 ○５の場面で，ノートへのまとめを交流することを通して，一人一人の考えを相手に伝える場面を確保し，相手からの評価を受けることで学びを定着させる場を確保する。 **【定着状況を見届ける】**

評価の観点	思考・判断・表現	単元	歴史的分野「現代の日本と世界」（3年生）	実践日時	R3.6.22
本時のねらい	冷戦後に国際協調の動きが強まったにも関わらず世界各地で地域紛争が起き続いている理由を追究することを通して，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響がいつの時代も争いの原因となっていることやその解決の難しさに気付き，戦後７６年間戦争を起こしていない日本の民主主義，経済成長，外交が持続可能な社会を実現するために大切であることが分かる。				

＜主体的・対話的で深い学びにつなげる指導について＞

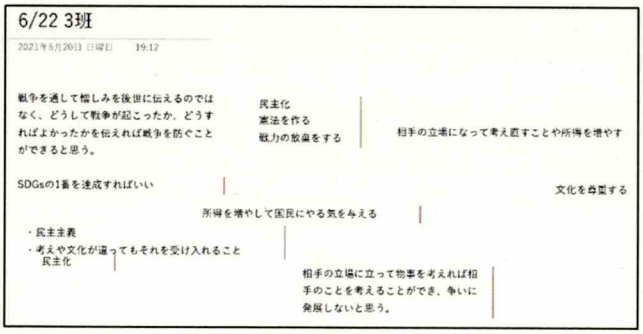
【手立て①：既習内容との意識のずれから課題を設定する】

導入では，既習内容「冷戦が終結し，ソ連が解体されたことで，国際協調の動きが強まり，国際連合を中心に世界の平和と安全が目指された。」ことを確認した上で，冷戦後も世界各地で地域紛争が起き続けている資料を提示した。単元導入時，生徒には「地域紛争は今も起きていることは知っているが，ほんの数件である。」という認識があったが，「冷戦後もこれほど多くの場所で長い期間に渡って地域紛争が起きているのはなぜか。」という驚きと，「世界の平和と安全が目指されたはずなのに。」という既習内容との意識のずれが生み出された。



【手立て②：タブレット端末を活用した対話的な学び】

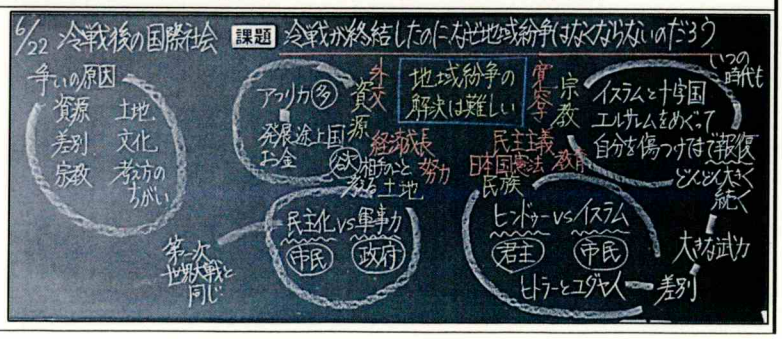
本時は，地域紛争の原因を理解した上で，解決することの難しさ（＝社会に見られる課題）に気付き，その解決に向けて，持続可能な社会を実現するために大切にしなければならないことを，既習内容を生かしながら構想するという授業である。歴史的分野においても，一人一人が新しい未来の姿を構想する学習を目指している。その中で，他者が構想したアイディアあふれる内容を知ることも，生徒が自分の考えを広げたり深めたりするために必要な過程である。そこで，タブレット端末のデジタルノートアプリを活用し，構想した内容を生徒や教師全員が共有できるようにした。構想することに慣れていないため，生徒にとって新しい未来の姿を構想することは難しい。しかし，このアプリを活用することで，自分の考えを短い言葉にまとめたり，多くの仲間の考えを即時的に取り入れたりする姿が見られた。



【手立て③：深い学びにするために】

持続可能な社会を構想するにあたって，世界各地の地域紛争を解決することは難しいが，解決する糸口を既習内容である戦後日本の歴史から求める場を設けた。全体交流では，「戦後，日本は７６年間戦争を起こしていないが，それはどうしてだろう。」と問うことで，民主主義や経済成長，外交，国民性など様々な意見が出された。こうした既習内容を踏まえることで，多面的・多角的な考察が行われ，持続可能な社会の構想につなげることができた。

＜板書，生徒の作品，ノートなど＞



本時のねらい　冷戦後に国際協調の動きが強まったにも関わらず世界各地で地域紛争が起き続いている理由を追究することを通して，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響がいつの時代も争いの原因となっていることやその解決の難しさに気付き，戦後７６年間戦争を起こしていない日本の民主主義，経済成長，外交が持続可能な社会を実現するために大切であることが分かる。

本時の展開

場	生徒の主な学習活動と生徒の意識の流れ	深い学びに迫るための指導の手立て	評価と手立て
つかむ／広める／深める／まとめる			

１．世界各地で地域紛争が続いている事実を提示し，課題を設定する。

・冷戦が終結して，国際連合の役割が高まった。世界で平和を目指そうとしていた。

・どうしてこんなにも地域紛争が起き続いているのだろう。

冷戦が終結して世界で平和を目指していたのに，どうして地域紛争が起き続いているのだろう

２．資源や土地の奪い合い等の視点から個人で追究し，追究した内容を全体で交流する。

【資源の奪い合い】
1991 年の湾岸戦争では，石油の利権の独占を目指すイラクとクウェートが対立した。資源は国の利益につながるため，原因となっている。

【土地の奪い合い】
1947 年からカシミール地方の領有権をめぐって，中国，インド，パキスタンが対立している。また，1973 年から西サハラの領有権をめぐって，モロッコと独立を主張する組織で対立している。土地は利益につながるため，原因となっている。

【支配者への不満】
2011 年からのシリア内戦では，政府と反政府勢力で対立している。支配者の政治に民衆は不満をもっていることが原因である。

【考え方の違い】
1948 年からパレスチナ地方やエルサレムをめぐって，イスラエルとアラブ諸国が対立している。エルサレムはキリスト教やイスラム教の聖地であり，考え方の違いから，その聖地を奪い合っている。

【植民地支配の影響】
1990 年からフツ族らが対立したことでルワンダ内戦が起こった。ヨーロッパによる植民地支配が身分差をつくり，それが原因で不満を募らせていった。

【問い】冷戦中はどうして地域紛争が少なかったのだろう。

地域紛争の解決は難しい

３．戦後，日本が紛争を起こしていない理由を考える。

【民主主義】
日本国憲法は国民主権，基本的人権の尊重，平和主義を基本原理としているので，戦争を起こさない考え方，政治の仕組みになっているからだ。

【経済成長】
高度経済成長などによって，国民の所得が増え，暮らしが便利になった。資源や土地を奪う必要はなくなったからだ。

【外交】
サンフランシスコ平和条約や日米安全保障条約を結んだり，国際連合に加盟したりするなど，国際社会の中で平和を目指そうと努力してきたからだ。

４．持続可能な社会をつくるために，大切にしなければならないことについて考える。

地域紛争を解決することは難しい。しかし，多くの戦争を起こしてきた日本が戦後７６年間，紛争を起こしていないことから，日本の民主主義や経済成長，外交は紛争を解決できる方法なのかもしれない。持続可能な社会に必要なのは，民主主義のように国民一人一人が政治に参加したり，平和を守ろうと努力したりすること，国民の豊かな生活が守られるように経済を成長させること，相手を受け入れて国際的に協力することだと思う。

５．本時の学習を振り返る。

冷戦が終結して世界で平和を目指していたのに，地域紛争が続いているのは，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響があるからだ。だから，地域紛争を解決することは難しい。しかし，持続可能な社会をつくるために，話合いをして相手を受け入れたり経済的に豊かになったりすることが大切だと思う。

冷戦が終結して世界で平和を目指していたのに，地域紛争が続いているのは，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響があるからだ。そして，冷戦中のアメリカとソ連という超大国による力の秩序がなくなった今，地域紛争を解決することは難しい。しかし，日本のように民主主義や経済成長，外交を大切にすることで，それが解決の糸口になるかもしれない。持続可能な社会に必要なのは，国民一人一人が政治に参加すること，平和を守ろうと努力すること，国民の豊かな生活が守られること，相手を受け入れて国際的に協力することだと思う。

深い学びに迫るための指導の手立て

○既習内容との意識のずれから課題を設定する。　**【見通しをもつ】**

○課題設定後，「今までの長い歴史の中での争いは，何が原因だったのだろう。」と問い，資源や土地の奪い合い等の追究の視点を確認する。

○全体交流では，「今までの争いの原因と比べると，どんなことがいえるだろう。」と問い，いつの時代も同じような理由で争いが起こっていることや，その解決の難しさに気付かせる。

○全体交流では，「冷戦中はどうして地域紛争が少なかったのだろう。」と問い，アメリカとソ連という超大国による力の秩序が保たれていたことが地域紛争を少なくさせていたこと，その秩序がない中で地域紛争の解決は難しくなっていることに気付かせる。

○「戦後，日本は７６年間戦争を起こしていないが，それはどうしてだろう。」と問い，地域紛争を解決する方法に【民主主義】【経済成長】【外交】があることに気付かせる。　**【深める】**

持続可能な社会を構想するための手立て
【広げる，深める】

○社会に見られる課題を明らかにする。
【２，３の場面】

・地域紛争を解決することの難しさを確認する。

○社会に見られる課題について構想する。
【４の場面】

・戦後の日本の民主主義，経済成長，外交を視点に，地域紛争の解決策について考える。

○持続可能な社会をつくるために大切にしなければならないことを，タブレット端末のデジタルノートに入力し，全体で共有する。　**【広げる】**

○本時の学習を振り返る場面では，単元導入時の「世界も平和や発展を手に入れた」という意識に立ち返らせることで，導入との意識のずれを再確認し，自己の変容に気付かせる。
【振り返る】

評価と手立て

【評価規準】（思考・判断・表現）
冷戦後に地域紛争が起き続いている理由を，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響であると多面的・多角的に考察し，地域紛争の解決は難しいことだと捉え，その過程について適切に表現している。

【評価方法】
・２，３の場面での交流，発言内容
・４の場面でのまとめの記述内容

生徒の学習状況Ｂ	生徒の学習状況Ａ
地域紛争が起き続ける原因を，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響と捉え，それらを関連付けて持続可能な社会を構想している。	地域紛争が起き続ける原因を，資源の奪い合いや土地の奪い合い，支配者への不満，考え方の違い，植民地支配の影響と捉え，戦後の日本の様子と関連付けて，持続可能な社会を構想している。
Ｂへ到達させるための手立て	**Ａへ到達させるための手立て**
「どうして民族や宗教の違いで対立が生まれるのだろう。」と問い，身分差から苦しい生活を強いられて不満を抱いたり，考え方の違いから相手を受け入れられなかったりしていることが原因であることに気付かせる。【２の場面】	「戦後の日本の様子から，持続可能な社会をつくるために大切なことは何だろう。」と問い，戦後の日本の民主主義，経済成長，外交との関わりから持続可能な社会をつくるために大切なことを考えさせる。【３の場面】